

だって わたしの 学びやもん

「こどもが自ら学びを進める」合言葉

学びのコンパス

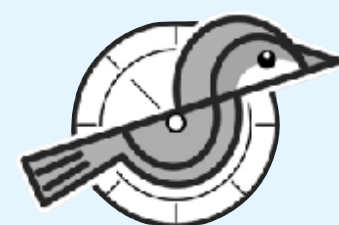


堺市の鳥「モズ」と方位磁針「コンパス」をモチーフとした
シンボルマークとして作成しました。

「コンパス」には、こども一人ひとりに合った「学び方」を大切にし、
あなたの学びを導くものにしたいという思いを込めています。

目次

学びのコンパス



01 これからの時代に求められる「学び」

02 「学びのコンパス」とは

03 「こどもが考える授業」から 「こどもが自ら学びを進める授業」へ

04 教科における探究的に学ぶプロセスと教員の役割

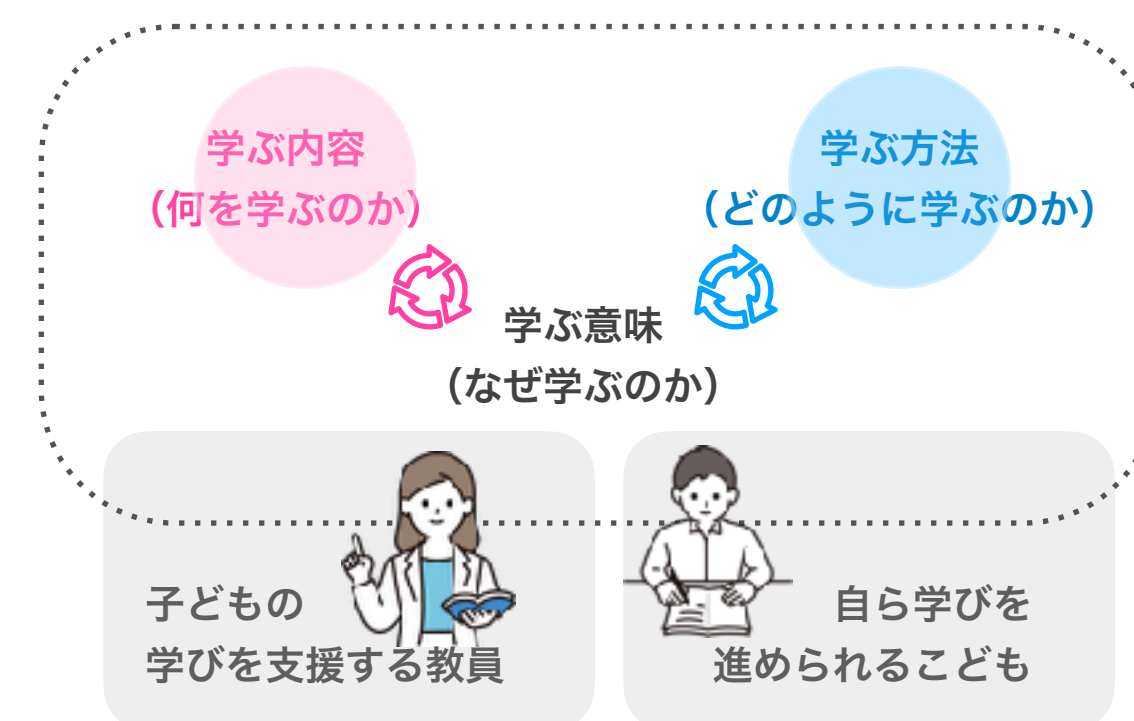
05 探究的に学ぶプロセスと ICT端末の利活用

01 これからの時代に求められる「学び」

こどもたちが、Society5.0、グローバル化の進展など急激に変化する予測困難な社会において、それぞれに思い描く幸せを実現し明るい未来を創り出せるように、多様で柔軟な学びが求められています。こどもたちは、自分自身や他者、社会の豊かさのために、自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、判断して行動できる資質・能力を身に付ける必要があります。

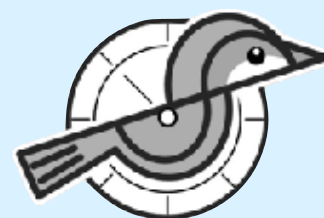
堺市では、学習指導要領で示された3つの資質・能力をこども自身が多様な他者とつながりながら学校教育の各教科等で育み、家庭教育や社会教育の場において様々な主体と協働・連携しながら実生活と結び付けて発揮する力を「総合的な学力」と考えています。この「総合的な学力」を身に付けるために、こども自ら課題を見つけ、何を学ぶのか（学びの内容）や、どのように学ぶのか（学びの方法）を選択したり表現したりすることができるよう学びを進めていきます。

こどもが学びを「自分ごと」として捉え、自ら学びを進めることが重要です。教員とこどもが右図の3つの観点を共有し、こどもの学びを支えながら、子ども自身が学びを進めることができるようになる学びを進めていきます。



こどもは、疑問や関心をもとに、問いを見出すことが大切です。その問いをもとに、自ら課題を立て、情報を収集、整理・分析して、まとめ・表現をするような探究的に学ぶ過程をこども自身が自覚することが大切です。なぜ学ぶのか、どのように学ぶのかをこども自身が考えながら、自分に合った学習材や学習方法、学習時間などを選択しながら、自分ごととして学びを進める経験が大切です。

教員は、教科の本質やこどもの実態をもとに、どのような学びの場（学習環境）を設定するのかを考え、個々のこどもを支援します。学習の動機づけや方向づけを行いつつ、学びの手立てや学習に必要な多様な情報を提示しながら、こどもが自分に合った学習材や学習方法、学習時間を判断し、自分に合った学習計画をたて、自己調整しながら自ら学びを進められるようにすることが大切です。



Why なぜ「コンパス」？

こどもは有能な学びて

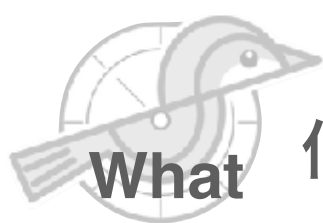
こどもは有能な学びてであるという子ども観のもと、子ども自身が学びを進める力を身につけられるように、教師用と児童・生徒用を作成しました。

こどもには、学ぶ力があり、教師はこどもの伴走者として同じ方向を向き、必要な支援と適切な指導をしながら支えていくという考え方を大切にしています。

方向性と「学び方」の多様性

コンパスは、進む方向を知るための道具です。「学びのコンパス」は、堺市がめざす「総合的な学力の育成」に向けて、個々の学びが進む方向性を導くための学び方を表しています。

こどもと教員が、一緒に進んでいくこと。めざす方向への行き方は多様にあり、学び方を柔軟に捉え、進めていくことを表しています。



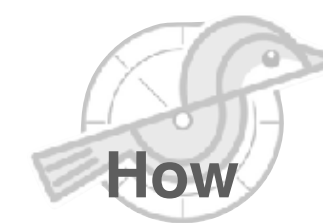
What 何を大切にしているの？

学ぶ「過程」にこどもが価値を見出す

自ら学びを進めるためには、こどもが「学び方」を学ぶことが大切です。一人で考えたり、友だちと考えたりする経験を積み重ねながら、場面ごとに目的に向かって、自分に合った「学び方」を学んでいくことが大切です。「だって わたしの 学びやもん」と自分の学びについて語ることができる「自分ごと」の学びをめざしています。

教員の「教科の本質」の理解

教科の学習において、各教科の学習指導要領で示されている目標を達成する学びが大切です。教員が、各教科における育むべき資質・能力を理解し、単元を構想します。また、こどもたちが「考えたいな」「やってみたいな」「調べたいな」という思いや願いをもてるよう、子どものもつ問いを大切にします。やってみたいことが目標や教科を学ぶ意味や本質と関連づくかどうかは、教師の教材研究によって支えられています。



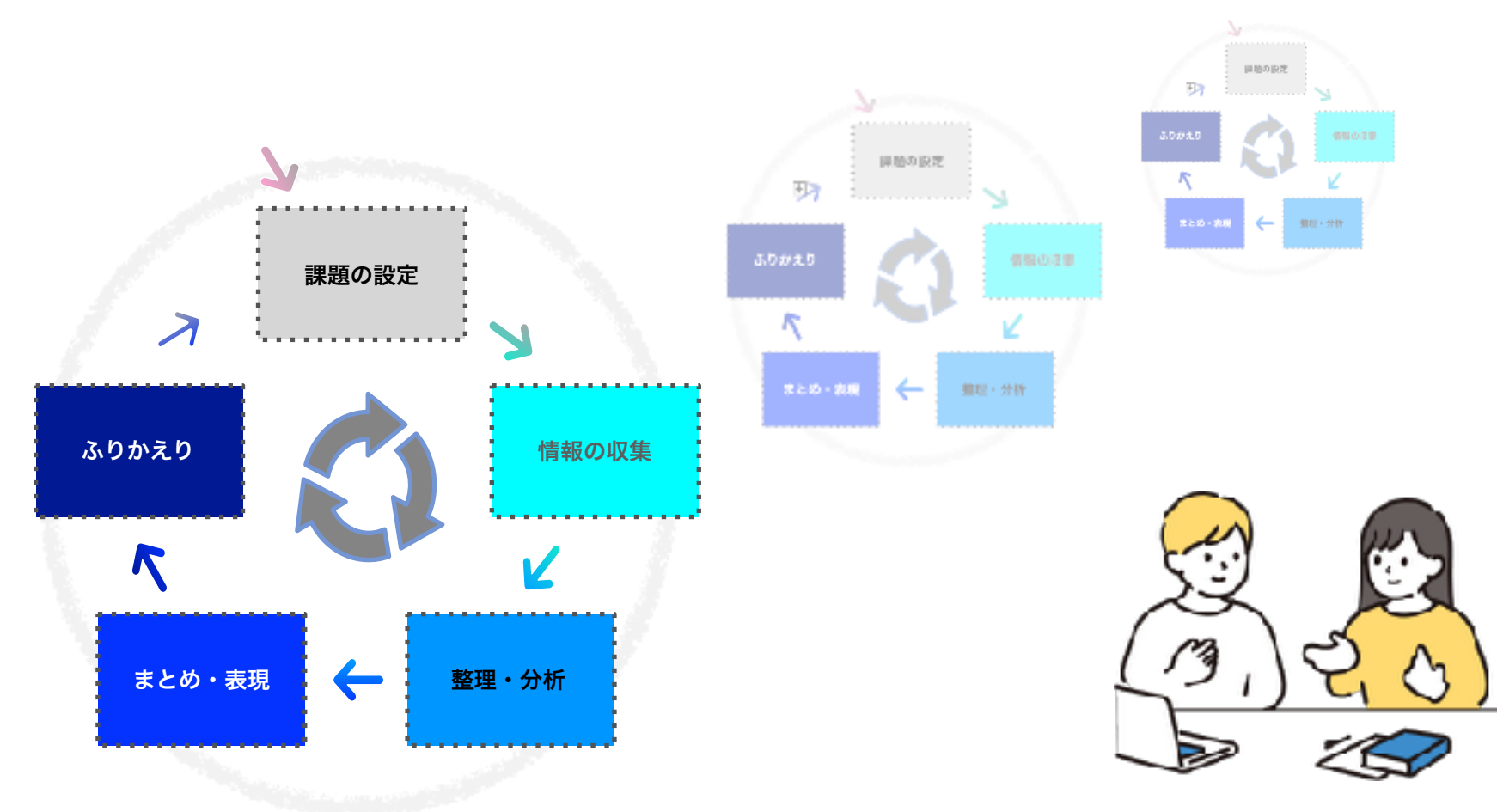
How どのように学びを進めるの？

こどもが「探究的に」学ぶプロセス

「学びのコンパス」では、こどもが課題と出会い、問いを見出すことを学びの出発点とし、なぜ学ぶのか、どのように学ぶのかを考えながら、自分に合った学習材や学習方法、学習時間などを選択し、学びを「自分ごと」として捉え、自ら学びを進めることを重視しています。

探究的に学ぶプロセスは、「1時間の学び」の場合もあれば、「単元を通しての学び」の場合もあります。

また、個々の学び方が多様となり、柔軟的に学びを進めるためにICT端末を、利活用することも大切です。



03 「こどもが考える授業」から 「こどもが自ら学びを進める授業」へ

こどもが自ら学びを進める授業では、各教科の資質・能力を単元を通して育成することが大切です。

堺市では、堺版授業スタンダードで「こどもが考える授業」を問題解決的な学習の流れに沿って進めてきました。「1時間の授業でこどもに力がついたかどうか」や、力がつく「学び合い」には、教師の「指導のしかけ」が大切であることを重視してきました。

学びのコンパスでは、堺版授業スタンダードが進化し、「単元を通して」こどもが「学び方」を学び、自ら学びを進められるように、教師がこどもに学びを委ねたり、適切に支援したりします。

学びのコンパスでは、「教員の役割」と「こどもの学び」が色を分けて示されています。詳細は **04** へ

コンパスcolumn

学習者主体の学びに至るには

主体のレベル		教科の学び	学び方	個別最適
	④ 子どもが自分で理解が深まるような学習の流れを計画して学ぶ	◎	◎	◎
	③ 先生が子供の理解が深まるような学習の流れを示して子どもが（それぞれ）進める	○	○	○
	② 先生が子供の理解が深まるような活動を準備して理解させる	○	△	×
	① 先生がわかりやすく丁寧に教える	○	×	×

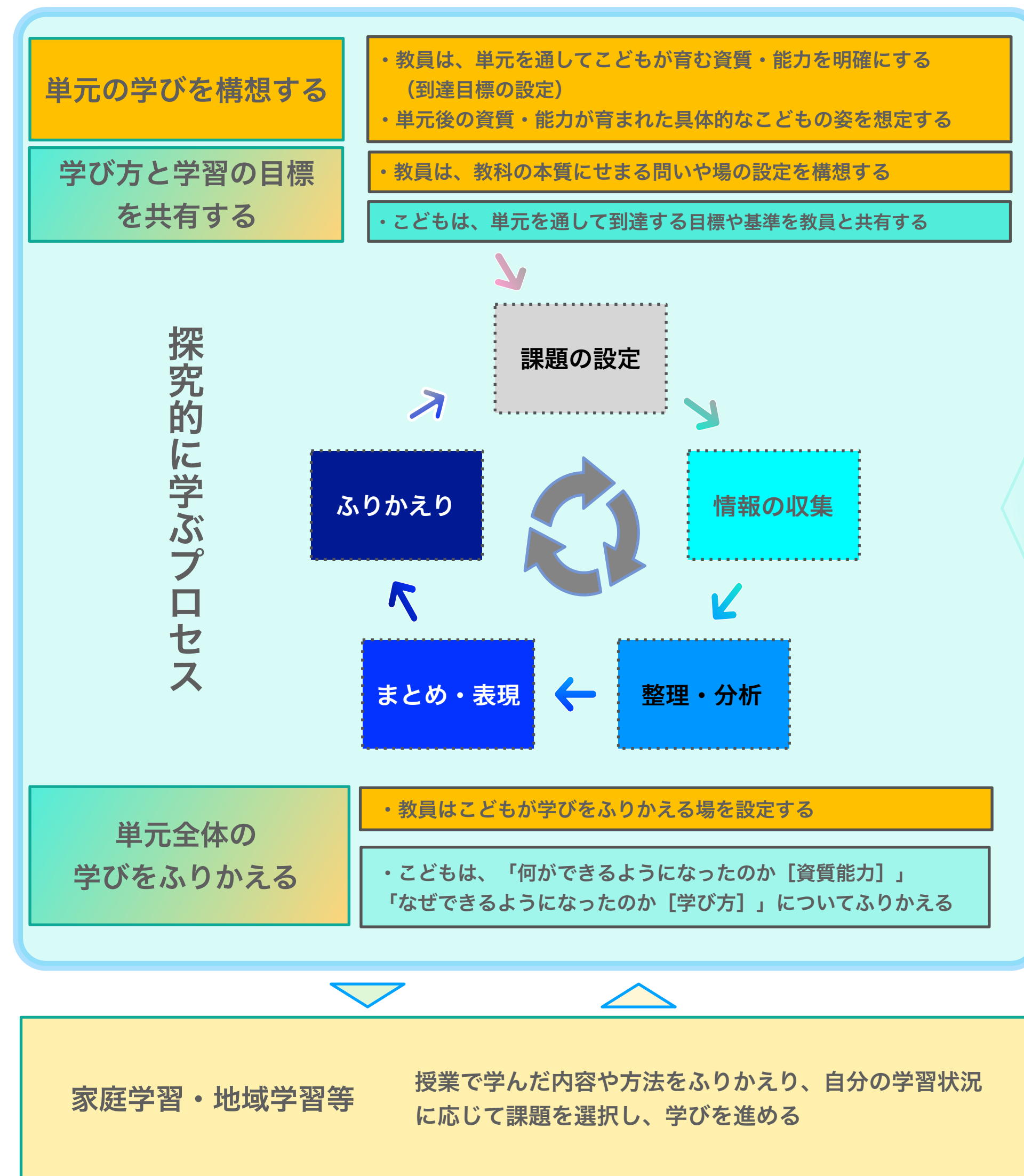
presented by Yu Taizan

中京大学 泰山 裕 教授 資料より（2024年3月）

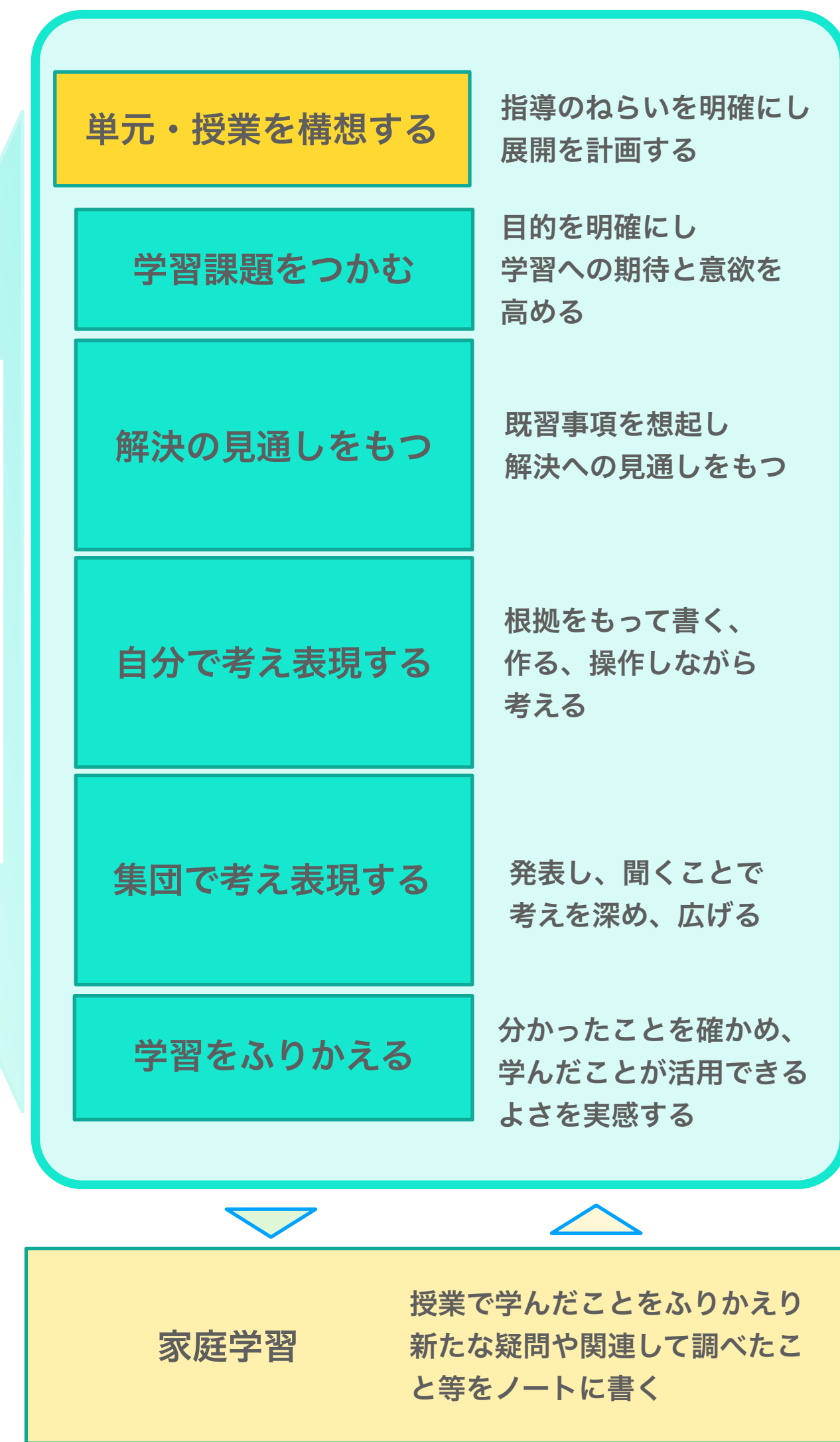
学びのコンパス

「こどもが自ら学びを進める授業の考え方」
こどもが進める **単元を通した学び**

教員の役割
こどもの学び



堺版 授業スタンダード
「こどもが考える授業」



04 教科における 探究的に学ぶプロセスと教員の役割

～ 単元（授業）の前後に ～

こどもが自ら学びを進められるには、どのような過程（学習材との出会い方・学び方・学ぶ順番・学ぶ道具・学ぶ場所など）を構想するかが大切です。

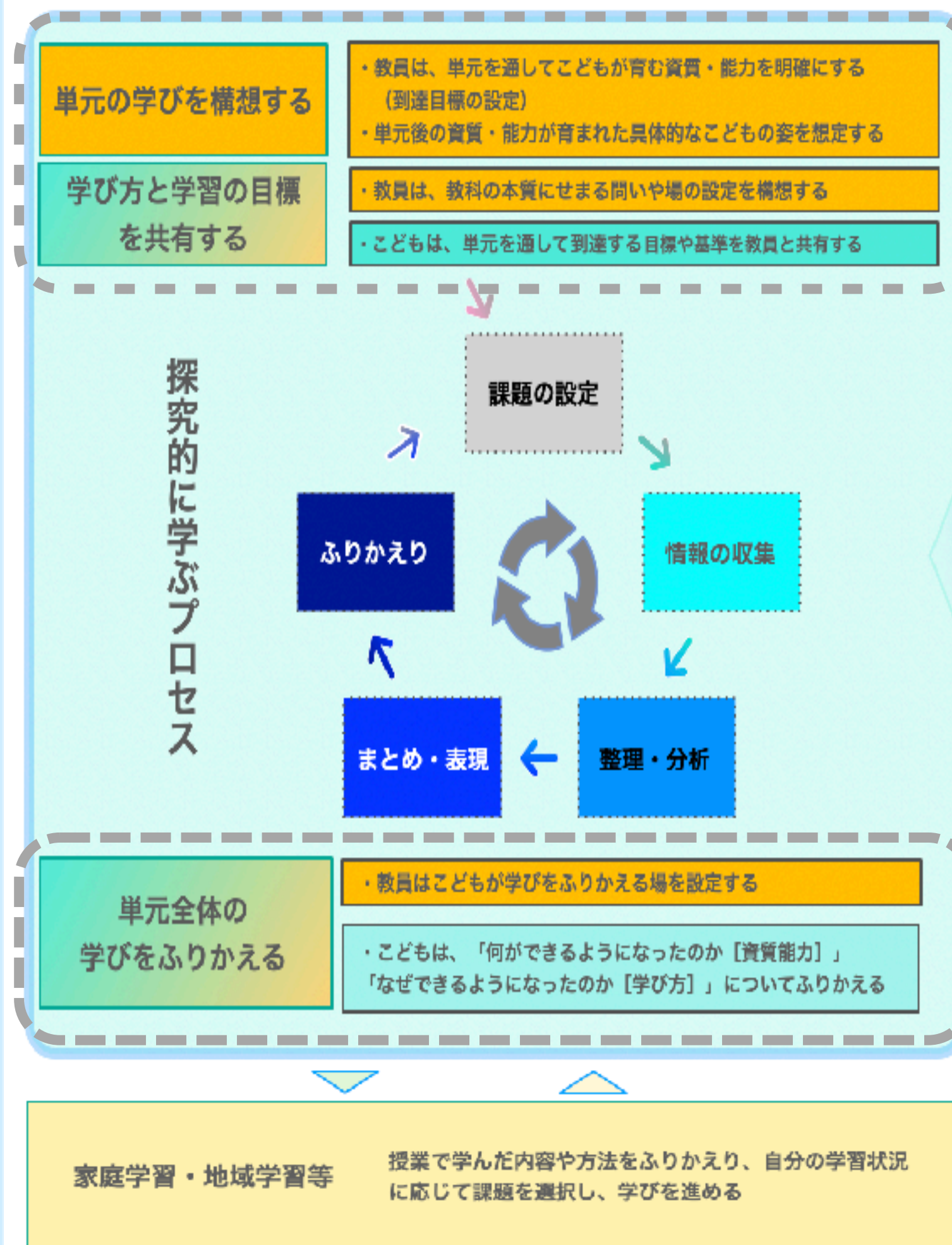
こどもが主体的に課題を見つけ、何を学ぶのか（学ぶ内容）や、どのように学ぶのか（学ぶ方法）を選択することができるよう、教師は事前の準備をします。

単元を通して身につける教科目標や内容を学習指導要領や教科書等から理解します。また、個々の学びの状況を把握することが大切です。

単元の学習後は、学んだ内容だけでなく学んだ方法についても振り返る場を設定することが大切です。こどもが「学び方」を学んでいることを自覚できるようにします。

【単元構想と単元全体のふりかえりについて】

こどもが自ら学びを進められるように 教員は**支援・指導**をします



こどもが自ら学びを進めるために大切な **教員の役割**

個々の学びの状況を把握する **こども理解**

教科の本質を捉える **教科の理解**

- チェック
- ✓ 児童生徒の既有経験と本単元のつながりを想定していますか
 - ✓ 児童生徒の実態に合う問いや場の設定を想定していますか
 - ✓ 個々の習得状況は違うことを考慮して、単元計画を構想していますか
 - ✓ 学習データ等を活用しながら、子どものつまずきやすいところを想定していますか
 - ✓ 既習事項と本単元のつながりを把握していますか
 - ✓ 単元を通して身につける資質・能力を理解していますか【教科の見方・考え方】
 - ✓ 単元後の資質・能力を身につけた具体的な子どもの姿を想定していますか
 - ✓ こども同士の協働による支援、ICT端末の活用など個々の学習状況に応じた支援・指導を計画していますか
 - ✓ こどものつまずきに対して、適切な場面で支援を行いましたか
 - ✓ 単元で身につける資質・能力を確認するための評価を行うことができましたか
 - ✓ こどもが、何ができるようになったか、なぜできるようになったかについて振り返る視点を持つことができていましたか
 - ✓ こどもが資質・能力を身につけるための機会を計画的に設定することができましたか

1

単元の学びを構想する

- ・教員は、単元を通して子どもが育む資質・能力を明確にする（到達目標の設定）
- ・単元後の資質・能力が育まれた具体的な子どもの姿を想定する

学び方と学習の目標
を共有する

- ・教員は、教科の本質にせまる問いや場の設定を構想する

- ・子どもは、単元を通して到達する目標を教師と共有する

じぶつ じしやう で あ
事物・事象との出会い

かんじる 感じる心
おもい 思い

子どもが自ら学びを進めるために大切な 教員の役割

個々の学びの状況を把握する 子ども理解

教科の本質を捉える 教科の理解

きょうか み かた
教科の見方
かんが かんが
考え方

こどもの学びの姿

教員の役割

なぜだろう
ふしぎだな
やってみたいな

- ・学習材との出会いから
気づいたことや問題意識をもつ

- ・学習材との出会いから
→解決したい課題は何か
→どのような事柄を課題とするかな
→自分の興味・関心とどう結びつくか

- ・どのような学習材との出会いが、子ども
にとって学びたい状況かを考える。

- ・教科の本質にせまる問いや学習環境（学
びの場）の設定を行う。

- ・子どもが身につける教科特有の見方・
考え方を理解する。

- 【教員が事前に想定する場の設定】
- ①道具の設定 【何を使って学ぶか】
 - ②環境の設定 【誰と学ぶか】 【どこで学ぶか】
 - ③時間の設定 【どのくらい学ぶか】

課題の設定

2

課題の設定

こどもの学びの姿

- ・何を【内容】どのように
【方法】学ぶのかなどに
ついて見通しをもつ。

【学習方法設定の例】

こどもが学ぶ方法を選ぶとは

- ①誰とどのように学ぶか

- ・教員に教わる
- ・友だちと協力する
- ・自分でやってみる など

- ②何を使って学ぶか

- ・教科書
- ・ICT端末
- ・ノート など

- ・課題の解決に向けて情報を収集
する
- ・どのような種類の情報をどのく
らい必要か見通しをもつ

【情報の収集の例】

- ・教員から『教わる』
- ・教科書や資料集などから、新しい
知識を『得る』
- ・インターネット等で自分で気になる
ことを『調べる』
- ・自分で実際にアンケートや
インタビューで情報を『収集』する
- ・自分で実際に『観察』・『実験』を
し結果を出す
- ・集めた情報は『記録』する

整理・分析

教員の役割

- ・児童生徒がどのような学習
状況かを把握する
- ・新しい方法は教える

【学習方法設定の視点】

- ①道具の設定
【何を使って学ぶか】
- ②環境の設定
【誰と学ぶか】
【どこで学ぶか】
- ③時間の設定
【どのくらい学ぶか】

- ・適切に支援するとは、困っ
ている児童生徒に個別対応
をする（教員が教える・こ
どもどうしをつなぐ等）

「個別最適な学び」「協働的な学び」
の一体的な充実とは？

個別最適な学びには2つの視点があります。①個々の子どもの特性や学習の進み具合等に応じた柔軟な指導を行う「指導の個別化」②こどもの興味・関心、キャリア形成の方向性などに応じた学習活動の機会を提供する「学習の個性化」です。

協働的な学びとは、この個別最適な学びが「孤立した」学びとならないように、子ども同士あるいは多様な他者と協働しながら、異なる考え方が組み合わせさり、より良い学びを生み出すことです。

「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての
子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協
働的な学びの実現～（中教審答申第228号より）

③

整理・分析

こどもの学びの姿

- 課題の解決に向けて収集した情報を整理・分析する

【整理・分析の例】

- 収集した情報を『分析』し自分の言葉で『整理』する
- 何のために『整理』するのか、どのように『整理』するのかを考える（ノートにまとめる、ICT端末に保存する・ポスターにするなど）
- 友だちの整理したものと、自分の整理したものを『比べ』たり『結びつけ』たりして見直す
- 友だちの作品を鑑賞したり、

- 課題の解決に向けて整理・分析したことをまとめ・表現する

【まとめ・表現の例】

- 整理、分析したものを 伝えたい相手に伝わるようにまとめる
- どのように『まとめ』『表現』すると伝えたいことが伝わるかを考える（ノートにまとめる・ICT端末にまとめる・動画を作成する・発表会をする等）
- これまで知っていることと結びつけて捉えなおす
- 整理・分析したことをもとに、考察の範囲を広げる（条件を変える・数値を変える・

教員の役割

- こどもがどのような学習状況かを把握する
- 新しい方法は教える

【学習方法設定の視点】

- ①道具の設定
【何を使って学ぶか】
- ②環境の設定
【誰と学ぶか】
【どこで学ぶか】
- ③時間の設定
【どのくらい学ぶか】

- 適切に支援するとは、困っている児童生徒に個別対応をする（教師が教える・児童生徒どうしをつなぐ等）

まとめ・表現

ふりかえり

④

ふりかえり

こどもの学びの姿

- 学んだ内容や学んだ方法についてふりかえる

【ふりかえりの例】

- 課題の設定に対して『ふり返し』をする【何ができるようになったのかな】
- 学び方に対して『ふり返し』をする【どのように学んできたかな】
- 学んだ意味を『ふり返し』をする【学んだことにどのような意味があるのかな】

教員の役割

- こどもがどのような学習状況かを把握する

課題の設定

「ふりかえり」は、課題の解決に向けてこどもが学んできた過程を、学んだ内容や学んできた方法についてふりかえります。

ふりかえりで大事なことは、学習内容に加えて、その学習内容をどのような学び方で身につけたかが重要です。

⑤

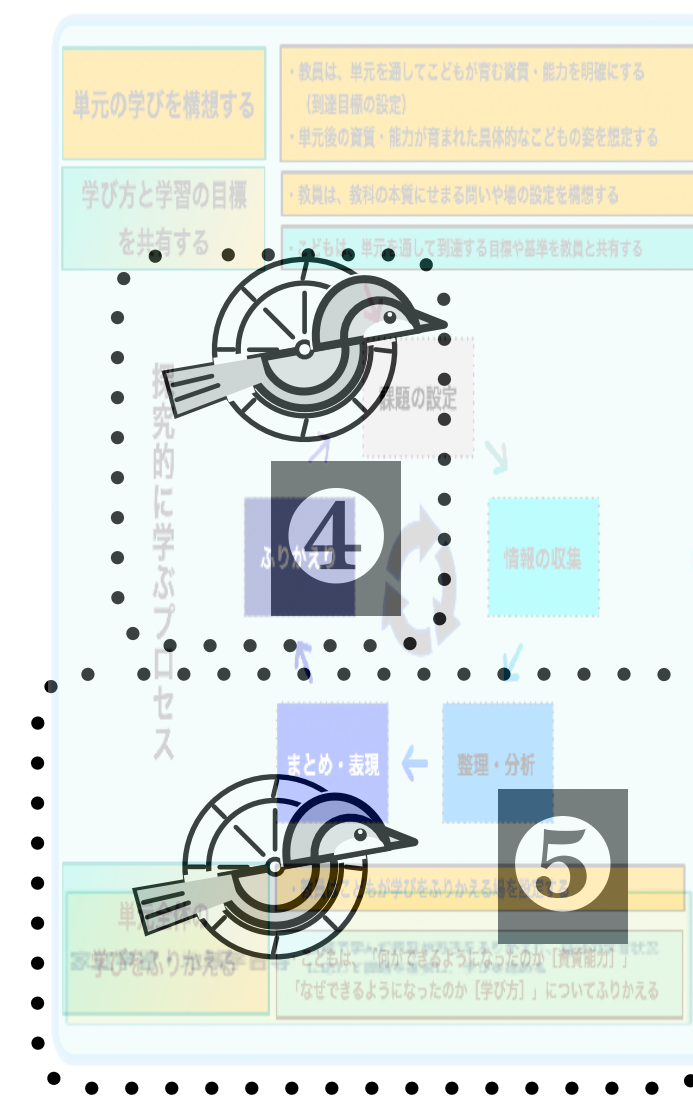
単元全体の
学びをふりかえる

- 教員はこどもが学びをふりかえる場を設定する

- こどもは、「何ができるようになったのか【資質能力】」「なぜできるようになったのか【学び方】」についてふりかえる

家庭学習・地域学習等

授業で学んだ内容や方法をふりかえり、自分の学習状況に応じて課題を選択し、学びを進める



05 探究的に学ぶプロセスとICTの利活用

こどもが自ら学びを進められるようICT端末を効果的に活用していくことが重要です。

まず、子どもが、ICT端末を使うことに慣れるよう、活用場面を増やします。

次に、ICT端末「だからこそ」のよさを先生とこどもとで見つけます。

最終的には、子どもが、ICT端末の活用場面を選択したり判断したりできるようにします。

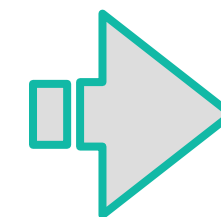
ICT端末の利活用では、何のためにICT端末を活用するのかという視点が大切です。

活用の事例を参考にし、学習活動を「動詞」で捉えることで、「何のために」ICT端末を活用するのかを、こどもと共有しましょう。

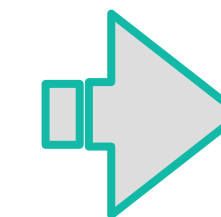


こどもが自ら学びを進めるためのICT端末の利活用の考え方

ICT端末を使うこと
を試す 慣れる



ICT端末だからこそその使い方を
見つける



場面によって活用法を
選択・判断する

